

言語学史から学ぶこと

杉 浦 茂 夫

0 1988年は、我が国では、言語研究の歴史が注目の的になった年であったと言ってよい。それは、期せずして、次の3著がこの年に出版されたからである。（出版順に掲げるが、(2)と(3)は同じ4月25日である。）

- (1) 安井 稔著『英語学史』（東京・開拓社）
- (2) 林 哲郎・安藤貞雄著『英語学の歴史』（東京・英潮社新社）
- (3) 林 栄一・小泉 保編『言語学の潮流』（東京・勁草書房）

題名から予想されるように、(1)と(2)は英語中心のものであるが、(1)が主として変形生成文法を対象としているのに対し、(2)は8世紀から始まる英語研究の歴史を、バランス良く扱っているという相違がある。

筆者も、ここ1・2年、必要があって、言語学史に関心を持ち続けてきたのであるが、そこから学ぶことがあればどんなことか、という観点から、若干の事項を論じてみようと思うのである。事柄の性質上、引用文が多くなること、及び論の進め方がやや散漫になることは、止むを得ぬことと許容して頂きたい。また、上記の3著の紹介・書評を意図しているものではないことをお断わりしておきたい。

1 研究の連続性

言語の科学的な研究が始ったのは19世紀になってからに過ぎないという主張をまず紹介しよう。Bloomfield (1933, p. 3) は次のように言う。（以下の引用文のうち、翻訳の出版されているものは「文献目録」にその翻訳も併せて表示し、本文では翻訳を付さない。）

It is only within the last century or so that language has been studied in a scientific way, by careful and comprehensive observation ;
 *Linguistics*, the study of language, is only in its beginnings.¹⁾

この説は、多くの言語学史の書物に受け継がれており、たとえば、Waterman (1970, p. 17) も、次のように述べている。

From 1800 on, therefore, we may speak of the scientific study of language, or, to use the term in its narrower sense, “linguistics”.

同じ趣旨の言明は、さらに、Lepschy (1970, p. 21), ミルカ・イヴィッチ (1974, p. 4) にも見い出される。さらに、Chomsky (1966) の p. 1 には、M. Grammont の同じ趣旨の言明が引用され、p. 75 の注には、‘Similar views have been widely voiced’ とある。

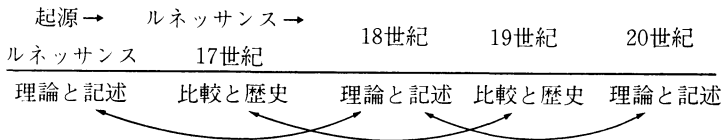
これに対して、たとえば、Robins (1967, p. 6) は次のように言う（イタリック体 杉浦）

The practical and theoretical results of Greek linguistics were taken over by Rome (with so much else of Greek intellectual life), and passed on by Rome at the hands of the late Latin grammarians to the Middle Ages, to be received from them in turn by the modern world during and after the Renaissance, together with the vital contributions from outside Europe. *At no stage is there a break that amounts to discontinuity in the European tradition of linguistics.*

1) この引用文の省略した部分に、「わずかな例外があり、それについてはすぐ後で述べる」とある。例外が古代インドにおけるパーニニの研究を指しているのは明らかで、それについては 3 でも触れる。ここでは、「例外」を認めること自体が、上の主張を強調することになることを指摘しておきたい。

Changes of theory, aims, methods, and concepts are repeatedly found, and they are the material of the history of linguistics ; but each generation of European linguists has had at its disposal a knowledge of the existence and some of the work of its forerunners. (ギリシアの言語研究の実用的・理論的な結果は、(ギリシアの知的生活の他の多くの面と共に)ローマに引き継がれ、後期ラテン文法家たちの手でローマから中世時代に伝えられた。そして、次いで、ヨーロッパ外部からの重要な貢献と共に、ルネッサンス期およびその後の現代社会に受け入れられたのである。言語研究のヨーロッパにおける伝統の中には、不連続状態にまで達するような断絶など、どの時代にも存在していないのである。理論・目的・方法・概念の変化は繰り返し見いだされ、言語学の歴史の材料となっている。しかし、それぞれの世代のヨーロッパの言語学者は、先駆者たちの存在と、彼らの研究のいくらかについての知識を、自由に利用してきたのである。)

同じような主張は、コセリウ（1979）にも見い出される。同書の第1章「近代言語学への小史」の中に、「時代順に言語学の動向が継起し交叉する様子を示した」図式がある。



そして、「現代言語学は、その本質的な取組み方において、けっして新しいものではなく、むしろ、言語学のもっとも古い伝統に立ち帰っている」のであると結論している。²⁾ たゞ、その復帰は、「明白に宣言された」ものではない

2) p.7. その論拠となったいくつかの点については、2で触れる。なお、上記の図式では17世紀を比較と歴史の時代としているが、Chomsky (1972, p.5) には正反対の意見がある。

く、「言語学者自身もしばしば気づかない復帰」であると付言している。そして、次のように言う時、Bloomfield の主張を念頭に置いていたことは明らかであろう。

いまはじめて歴史的・批判的な方法が誕生したのだという先入観にもとづいて、近代言語学の誕生をこの世紀（19世紀）と見なす人は、たしかに前の時代の思索を知らないものであり、…（p. 6）

上に引用した2つの主張の対立点は明確である。前者は、言語学（linguistics）を、「言語の科学的研究」と定義した上で、それまでの言語研究は言語学ではないと主張しているのに対し、後者は、特に方法論だけを強調することなく、対象・目的などにおいて連続性があると主張しているのである。問題は、「科学的」とは何か、特に言語研究における「科学的方法」とは何か、という点にあると思われるのである。

Bloomfield 流の考え方からいけば、上の引用文にもあるように、「注意深い、かつ包括的な観察による」ということがまず第一条件であろう。さらに、Bloomfield（1933, p. 20）の次の陳述も重要である。（イタリック体 杉浦）

The only useful generalizations about language are *inductive* generalizations.

さらに、Dinneen（1967, pp. 4f.）は、“Linguistics is a Scientific Study”という見出しの下に、科学的方法が要求するものとして次の3つの性質を挙げている。

- 1) 経験的 (empirical)
- 2) 厳密性 (exact)
- 3) 客観性 (objective)

以上のような科学性は、現在の科学にあっては、その一面しか表していないのではないと思われる。『日本大百科全書』（小学館、1985）の「科学」の項（秋間 実・荒川 泓氏執筆）では、主として自然科学について、その方法論の特徴を次のように述べている。

- 1) 実験・観察・調査などを行なう。
- 2) それによって得た知識を整理・分析・総合して、概念や仮説をつくる。
- 3) それらを実践によって検証し、対象の一般的・必然的・本質的関連、すなわち対象の客観的な法則を明らかにする。
- 4) その発展の一定の段階で、いくつかの基本法則に基づいて、関連した諸現象を統一的に説明する理論体系をつくりあげる。

Bloomfield 流の科学性は、上の 1) とせいぜい 2) の一部をカバーしているに過ぎず、言語研究においても、3) 4) の必要性が痛感されて、演繹法を重視する変形生成文法の出現となったと思われるのである。言語研究における科学性については、次の Lyons (1968, p. 1) の冒頭の言葉が中庸を得ているように思われるのである。（イタリック体 杉浦）

Linguistics may be defined as the scientific study of language. This definition is hardly sufficient to give the reader any positive indication of the fundamental principles of the subject. It may be made a little more revealing by drawing in greater detail the implications contained in the qualification 'scientific'. For the moment, it will be enough to say that by the scientific study of language is meant its investigation by means of controlled and empirically verifiable observations and *with reference to some general theory of language-structure.*

上の引用文のイタリック体の部分、「言語構造の一般理論に関連付けられた」言語研究の伝統は、ギリシア人にその起源を発していることは明らかであり、また Bloomfield 流の「科学性」そのものが、現在では疑問視されてい

ることを併せて考慮すれば、研究の連続性の主張の方が説得力があるように思われるのである。

2 研究の反復性

前節で、Bloomfield の主張を退けて、言語研究の連続性の主張を支持する理由を2つ挙げたが、さらにもう1つの理由を付け加えておきたい。これは、コセリウ（1979）が指摘していることであるが、たとえば、de Saussure のような偉大な言語学者に負うと、一般の言語学史で教えられる諸概念は、実はもっと古くから、さまざまな形で、論じられてきたものだというのである。つまり、研究は反復して行なわれてきたのであり、「現代言語学は、その本質的な取組み方において、けっして新しいものではなく、むしろ、言語学のもっとも古い伝統に立ち帰っている³⁾のである。」以下、同書に従って、具体例を見ることにしたい。

2.1 ラングとパロール

一般に、de Saussure に帰せられているこの区別については、あらためて紹介する必要もないであろう。コセリウ（1979, p. 12）は、「この区別もまた、文法という学問が存在した時代から、すべての文法の中に暗黙のうちに存在している」という。いかなる文法書も、パロールを記述したことは一度もなく、つねにラングを記述することを主張してきたが、これは、いわば「暗黙の了解」であったという。明確な形でこの区別があらわれるのは、G. W. F. Hegel の『哲学百科』（1830 第3版）の中で、‘Die *Rede* und ihr System, die *Sprache*’ と簡潔に述べられた *Rede* と *Sprache* という語で、ドイツ語では現在でもそれぞれパロールとラングに相当する意味で用いられている。また、ドイツの言語学者 Georg von der Gabelentz（1840-1893）が、1891年に出版した『言語学、その課題、方法と今日までの成果』の中では、

3) コセリウ（1979, p. 7）

この区別が公式化され、議論されていると指摘している。

このラングとパロルの区別については、Robins (1967) にも言及がある。その1つは、古代インドの言語研究において、この区別がすでになされていたとするもので、次のようにいう。

Indian linguists sought to express it (*i. e.* the relation between the perceived utterances ... of a language and the language itself) in the theory of *sphoṭa*. ... Essentially, in any linguistic element or constituent two aspects are distinguished, the actual event or individual realization (*dhvani*) and the unexpressed and permanent entity (*sphoṭa*) actualized by each occurrent *dhvani*. (p. 140)

(インドの言語学者は、それ(言語の認識された発話と言語自体の間の関係)を、⁴⁾sphoṭa の理論において表現しようとした。...本質的には、言語のどんな要素、構成素においても、2つの様相——現実の出来事ないしは個々の実現(⁴⁾dhvani)と、それぞれの生起している dhvani によって実現される、表現されていない永続的な実在——が区別されているのである。)

もう1つの Robins (1967) の指摘は、ラングに似た概念は、すでに Humboldt にあったとするもので、次のようにいう。

4) sphoṭa と dhvani が、サンスクリット語で何を意味するかは不明であるが、Sir Monier-Williams 編 *A Sanskrit-English Dictionary* (1899, Oxford) によると次のようである。

sphoṭa ; bursting, opening

sound (conceived as eternal, indivisible, and creative)

the eternal and imperceptible element of sounds and words and the real vehicle of the idea which bursts or flashes on the mind when a sound is uttered. (哲学用語集での意味)

dhvani ; sound, echo, noise, voice, tone, tune, thunder, empty sound without reality

Humboldt's *innere Sprachform* is the semantic and grammatical structure of a language, embodying elements, patterns and rules imposed on the raw material of speech. In part it is common to all men, being involved in man's intellectual equipment; but in part also the separate *Sprachform* of each language constitutes its formal identity and difference from all other languages (thus it may be likened in some degree to the *langue* of de Saussure's later *langue-parole* dichotomy). (p. 175)

(フンボルトの内部言語形式は、ある言語の意味・文法構造で、ことばの原材料に課される要素・型・規則を具現するものである。それは、一面では、人間の知的素養の中に含まれていて、全人類に共通である。しかし、一面では、各言語の別個の言語形式は、その言語の形式上の独自性と、他のすべての言語との相違を構成している（だから、ド・ソシュールによって後でなされたラング・パロールの分割のラングに、ある程度、たとえてもよいのである）。

以上のような様々な指摘から考えられることは、以下に述べる諸区別についても言えることであるが、さまざまな知識や見解がある程度蓄積されて、一種の臨界期に入った時に、偉大な学者が出現して、それらの知識・見解を明確な形で要約し、提示してくれるのだということである。

2. 2 共時態と通時態

この区別もまた、de Saussure に帰せられるもので、通時態一辺倒の19世紀の言語学に対するアンティ・テーゼとして、共時態を強調した点が、20世紀の言語研究の出発点となったと説かれている。コセリウ（1979, pp. 10ff.）によれば、この区別も、もっと早い時代の著作に見い出されるという。たとえば、「18世紀のもっとも重要な言語学上の著作である」⁵⁾ James Harris,

5) コセリウ（1979, p. 6）

Hermes or a Philosophical Inquiry Concerning Language and Universal Grammar, (London, 1751) のフランス語への翻訳に添えられた注の中に、「語源的な観点」に対して「体系的順序」という観点がすでにあるという。19世紀になると、前節でも挙げた Georg von der Gabelentz の著作の中に、「同時的事実」と「継起的事実」の区別があり、de Saussure はこの定義を採用したのだという。

また、ミルカ・イヴィッチ (1974, p. 31) は次のように言う。

...フンボルトは通時論 diachrony (=言語の歴史) に固執しなかった。むしろ彼が注意を集中したのは、まず何よりも、所与の一時点における言語資料の解明、つまり言語の共時的 synchronic 断面における考察であった。...

Humboldt についての Robins (1967) の次の2つの言葉は、ここで引用する価値が十分あると思う。

He (= Humboldt) did not, in fact, sharply distinguish the two aspects of linguistics, synchrony and diachrony,... (p. 174)

(彼は、実際に、共時態・通時態という言語学の2つの観点を、明確に区別したわけではなかった。)

A number of ideas on language and the study of language very much in sympathy with those of de Saussure had, in fact, been expressed nearly a century before by von Humboldt ; the extent to which de Saussure was directly influenced by Humboldt is uncertain, though a connection has been suggested. (p. 200)

(言語および言語研究に関して、de Saussure が抱いたのと全く同種の、い

くつかの概念は、約 100 年前に、von Humboldt によって、すでに発表されていた。de Saussure が Humboldt によって、どの程度まで、直接に影響を受けたかは不明であるが、関係があったことは暗に示されている。)

この場合もまた、de Saussure は、先人が想定していたことを、「形式化し、⁶⁾ 明示的にした⁶⁾」ということになると思う。

2. 3 シニフィアンとシニフィエ

小林英夫訳で「能記」「所記」という訳語を与えられたこの 2 つの概念の区別もまた、de Saussure に帰せられている。しかし、コセリウ (1979, pp. 8f.) の指摘によれば、この区別は非常に古い時代から存在しており、アリストテレスの『解釈について』の中の、「声の中にあるもの」「精神の中にあるもの」という区別に端を発しているという。この区別は、ストア学派の文法において明白となり、数世紀の流れの中の断絶を経て、de Saussure に継承されたのだというのである。

2. 4 言語記号の恣意性について

de Saussure の用語で l'arbitraire du signe と呼ばれるこの概念もまた、彼に発するのではなく、古くアリストテレスに始まる伝統であると、コセリウ (1979, pp. 14f.) は指摘している。古代ギリシアにおける physis 対 thesis (自然説 対 慣習説) の論争の中で、「現実の命名は、理想すなわち原型の必然的な具現であり、名前と事物の間には、すでにおのずからの関係が存在する⁷⁾」とする前者に対し、後者の立場をとるアリストテレスは、『解釈について』の中で次のように主張している。

名前とそれが指示する事物との結合は、慣習によるのであって、自然説支

6) Robins (1967, p. 200)

7) 興津達朗 (1976, p. 6)

持者の説くように、両者の間に決められた必然性が存在するというのではなく、まったくの恣意的な (arbitrary) 関係による⁸⁾。

コセリウ (1979, p. 15) によれば、この慣習説の伝統は、「ポエティウスからスコラ哲学をとおり、近代期にいたるまで絶え間なく続いている」のであり、「恣意的」という用語自体も古代にまでさかのぼるという。したがって、「言語記号の恣意性」という表現は、概念としてばかりではなく、用語としてもさまざまな著作の中に見い出されるという。

以上、de Saussure に帰せられる4つの区別・概念について2・1から2・4で言及してきたが、これは de Saussure の独創性を否定するためであったのではない。de Saussure の業績の意義は、Bierwisch (1971, p. 21) の次の言葉の中に見事に要約されていると思う。

Many of the concepts outlined here have also been formulated by other linguists. They were a necessary consequence of the development of the subject, and were in part a formulation of long accepted principles. However, Saussure was the first to incorporate them into a general theoretical framework.

(上に概説した諸概念の多くは、また、他の言語学者によっても公式化されている。それらは、この主題の発展の必然的な結果であり、一部は、古くから受け入れられてきた原理の公式化であった。しかし、Saussure は、それらの概念を、一般的な理論上の枠組みの中に組み入れた最初の人であった。)

2. 5 一次言語とメタ言語

ふつうは、「対象言語とメタ言語」(object-language, metalanguage) とい

8) 奥津達朗 (1976, p. 6)。この部分は奥津氏の解説であって、アリストテレス自身が arbitrary に相当する用語を用いたわけではない。

う用語でなされるこの区別は、誰が、何時、言い出したものか、筆者には不明であるが、コセリウ（1979, pp. 9f.）によれば、「最新のものと思われる」という。彼によれば、「単語の使用と単語そのものに対する反省との間のこの区別」は、けっして新しいものではなくて、聖アウグスティヌスの著作の中にすでに見られ、その後何度か取り上げられたが、特に中世の論理学ではこの区別が明白になされているという。そして、このことは、「現代言語学の主題と問題が偶発的なものではなく、歴史の流れにおいて再度の取組みと再発見が今日、脚光を浴びている」ことの証拠だと主張している。

3 egocentrism

ここで「自己中心主義」というのは、悪い意味ではない。人間ならば誰しも、この地球上のある地点に生を受け、成長するのであるから、自分に身近な場所に愛着を感じるのは当然のことである。また、過去の膨大な研究業績に対し、神の如き公平さをもって接することは不可能で、自分の考え方に近いものに共感を持つこともまた当然のことである。人間のもつ、このような自然の傾向を、ここでは「自己中心主義」という語で意味することにし、このような性質が言語学史の上に、どのように現われているかをみてみようと思うのである。

3. 1 愛国主義

いわゆる「グリムの法則」が、実はデンマーク人 Rask に負うところが多いことは有名な事実で、どの言語学史の書物も、そのことに言及している。しかし、デンマーク人である Jespersen の言及のしかたは、感情的な色彩が込められているといってよい。対比のためまず、Robins (1967, p. 171) の記述を引用しよう。

The correspondences now known under the title of 'Grimm's law' were in fact first stated and illustrated by Rask in the work just

quoted.

(現在「グリムの法則」という名前で知られている対応関係は、実は、上に引用した研究の中で Rask が最初に述べ、例証したものであった。)

この、いわば、淡々とした記述法に対し、Jespersen (1922) の次の2つの記述には、明らかに残念だという感情がにじみでているように思われるのである。

If it had been published when it was finished, and especially if it had been printed in a language better known than Danish, Rask might well have been styled the founder of the modern science of language, for his work contains the best exposition of the true method of linguistic research written in the first half of the nineteenth century and applies this method to the solution of a long series of important questions. (pp. 37f.)

If any one man is to give his name to this law, a better name would be 'Rask's Law', ... (p. 43)

しかし、このような記述法は、Jespersen の人間的な一面を垣間見る思いをさせてくれる点で興味深く、好意をもって受け入れられるべきものであると思う。

3. 2 自説中心主義

Robins (1967, p. 76) には、プリスキアーヌスや後期のラテン語文法家たちに対するスコラ学派の哲学者たちの批難のいくつかが、ブルムフィールド学派など20世紀前半の純粋な記述的傾向に対する変形生成文法家たちの批難と類似している、という指摘がある。その批難とは、「資料の記録という単

なる観察上の妥当性に味方して、理論の説明上の妥当性を無視している」ということである。さらに、89ページには、「現代の用語で言えば、様式派(modistae)は理論志向的で、古典文学やプリスキアーヌスの文法の支持者は、資料志向的であって」、その相違は例文の選択に現われており、前者が現実の発話や情況との適合性を無視して公式に則して例文を作り上げたのに対し、後者は古典の本文からの引用文を利用したという指摘がある。以上の所説から感じることは、2節で主題とした「研究の反復性」ということであるが、ここでは、別の見方から考えてみたい。1988年という時点では、変形生成文法が全盛であって、ブルムフィールド学派の影は薄いと認めねばならない。しかし、ギリシア時代以来の長い背景の中に置いてみると、振り子が逆に振れる可能性も無いとは言えない。従って、現在無視されている過去の業績が、新しく脚光を浴びることもありうるわけで、Robins (1967, pp. 3f.)の次の言明は適切なものと思う。

In the history of a science, and in the present case in the history of linguistics, there is the additional subjective element involved in determining what activities and aims on the part of earlier workers shall be deemed to fall within its sphere and so to belong to its history.

(科学の歴史においては、この場合は言語学の歴史ということになるが、先人のなしたどんな業績・目標がその科学の分野に入り、従ってその歴史に属すると考えられるかを決定することに関わって主観的要素がさらに加わってくる。)

上の引用文の「主観的要素」とは、自説に近いものに好意的であるということの意味と思われる。そこで、ブルムフィールド学派と、変形生成文法家たちの「主観的要素」がどのように相違しているかを探究することは無意味ではないと思う。言語学史の書物を開けば、解説的な説明は、ほとんど

の書物に見い出されるが、以下では Bloomfield と Chomsky の原典に依拠して、過去の研究に対するそれぞれの評価を探ってみよう。

3. 2. 1 Bloomfield (1933) から始めると、ここでは、サンスクリット語の文法家 Pāṇini に対する高い評価と、スコラ学派に対する低い評価が対照的である。

This grammar, ..., is one of the greatest monuments of human intelligence.⁹⁾ It describes, with the minutest detail, every inflection, derivation, and composition, and every syntactic usage of its author's speech. No other language, to this day, has been so perfectly described. (p. 11)

Pāṇini の評価に関して興味深い事実を付記しておきたい。Robins (1967, p. 146) は次のように言う。

The whole descriptive procedure may be compared with the stages by which the transformational-generative grammarians, more than two thousand years later, arrive at an actual form through successive representations of elements combined with each other in accordance with ordered rules.

(記述の手順はすべて、二千年後の変形・生成文法家たちが、順序づけられた規則に従って、おたがいに結合された諸要素の連続的な表示を経て、現実の形式に到達する諸段階に対比することができよう。)

9) この賛辞は、Bloomfield が1929年に書いた書評の中ですでに用いられており、1933年の *Language* 中で再び用いられたものだという指摘が、M. B. Emeneau ('Bloomfield and Pāṇini; *Lg.* Vol. 64, No. 4, 1988, pp. 755-760.) によってなされている。そこでは、さらに "an indispensable model for the description of languages" という讃辞が続いているという。Bloomfield の Pāṇini に対する傾倒については、上の Emeneau の論文の中に、多くの事例が挙げられている。

ところが、Chomsky の 3 つの著作（次節で示す）を読んだ限りでは、Pāṇini に対する言及は見い出されないのである。これは、Robins が「記述の手順」の類似性を指摘したのに対し、Chomsky は、もっと根本的な言語観において Pāṇini が記述・分類言語学派に属していると判断したからであろうと思われる。

スコラ学派の言語研究は、その系譜においては、Chomsky に連なるものであると思われるが、Bloomfield (1933) は次のように述べて、「貢献度が低い」と評価している。

The scholastic philosophers discovered some features of Latin grammar, ... They contributed much less than the ancients, who had, at any rate, a firsthand knowledge of the languages they studied. (p. 6)

3. 2. 2 Port-Royal の文法が、三世紀を経た今日、復活して脚光を浴びるに至ったのは、Chomsky による言及がその主因であると言ってよいと思う。このことは、たとえば、南館英孝訳の『ポール・ロワイヤル文法』（大修館書店、1972）に付せられた「編者の序」（ポール・リーチ執筆）を一読すれば直ちに分かることである。Chomsky の Port-Royal 文法に対する言及は、筆者の知る限りでは、(1964), (1966), (1972) の 3 著に見い出される。このうち、(1966) の p. 31～p. 59 にわたって、もっとも詳細な言及があり、そこでは、『ポール・ロワイヤル文法』のいくつかの章の内容についての紹介までなされている。これに対して、(1964) と (1972) の言及は、ともに 2～3 ページで、その内容も (1966) と重複している。そこで以下に、(1966) から、Chomsky の「主観的要素」を如実に示していると思われる箇所を紹介してみよう。

This point¹¹⁾ is brought out with particular clarity in the Port-Royal

10) Chomsky (1966, p. 97) の注67を参照。

11) 「深層構造」と「表層構造」を区別する必要性を指す。

Grammar, in which a Cartesian approach to language is developed, for the first time, with considerable insight and subtlety. (p. 33)

The Port-Royal grammar is apparently the first to develop the notion of phrase structure in any fairly clear way. It is interesting, therefore, to notice that it states quite clearly the inadequacy of phrase-structure description for the representation of syntactic structure and that it hints at a form of transformational grammar in many respects akin to that which is being actively studied today. (p. 42)

Port-Royal 文法に対する言及は、Bloomfield (1933, p. 6) にも見い出されるが、「諸種の言語、特にラテン語、の構造が普遍的妥当性をもつ論理基準を具現したものであるということを示そうとした」一般文法について触れた後で、簡単に次のように述べているだけである。

The most famous of these treatises is the *Grammaire générale et raisonnée* of the convent of Port-Royal, which appeared in 1660.

4. おわりに

以上、言語学史から学ぶことは何かという観点から、いくつかの問題を論じてきた。言語研究が、2000年に及ぶ長い歴史を持つこと、そして現在の時点がその終点ではなく、今後も果てしなく続いていく営みであることを思う時、次の Robins のことばは示唆に富んでいると思う。それは、「現在の眼を通して過去を見つめ、以前の研究のなかで、今日の接近法と特に関連性が深いか、反対に全く無関係に思われる様相にのみ集中する態度」(以下の引用文中の *this, it* が指すのはこの態度である) について述べたものであるが、我々としても、そのような危険に陥らぬよう、常に自戒する必要がある。

This is quite proper, indeed it is almost inevitable, in such a short notice ; but it carries with it the danger of evaluating all past work in a subject from the point of view in favour at the present, and of envisaging the history of a science as an advance, . . . , towards the predetermined goal of the present state of the science. (p. 3)

(このような態度はまったく適切なもので、そのような短い紹介の中では必然的といってもよい。しかし、そうすることには、ある学問における過去の研究をすべて、現在優勢な見地から評価し、ある科学の歴史を、その科学の現状という、前もって決定された目標へ向っての前進であるとみなすという危険が伴うことになる。)

文 献 目 録

- Bierwisch, M. 1971. *Modern Linguistics : Its Development, Methods and Problems*. The Hague : Mouton.
- Bloomfield, L. 1933. *Language*. New York : Holt, Rinehart & Winston.
(三宅 鴻, 日野資純訳『言語』大修館)
- Chomsky, N. 1964. *Current Issues in Linguistic Theory*. Janua Linguarum, Series Minor, Nr. 38. The Hague : Mouton.
(橋本萬太郎, 原田信一訳『現代言語学の基礎』大修館)
- _____ 1966. *Cartesian Linguistics : A Chapter in the History of Rationalist Thought*. New York : Harper & Row.
(川本茂雄訳『デカルト派言語学』みすず書房)
- _____ 1972. *Language and Mind*. Enlarged ed. New York : Harcourt Brace Jovanovich.
(川本茂雄訳『言語と精神』河出書房新社。)
- コセリウ, E. 1979. 『一般言語学入門』下宮忠雄訳 三修社
- Dinneen, F. P., S. J. 1967. *An Introduction to General Linguistics*. New York : Holt Rinehart & Winston. (三宅 鴻, 山中桂一, 秋元実治訳『一般言語学』大修館)
- イヴィッチ, M. 1974. 『言語学の流れ』早田輝洋, 井上史雄共訳, みすず書房
- Jespersen, O. 1922. *Language : Its Nature, Development, and Origin*. London : George Allen & Unwin. (市河三喜, 神保格訳『言語—その本質・発達及び起

- 源』岩波書店、三宅鴻訳『言語—その本質・発達・起源(上)』岩波文庫)
- Lepschy, G. 1970. *A Survey of Structural Linguistics*. London : Faber and Faber.
- Lyons, J. 1968. *Introduction to Theoretical Linguistics*. London : Cambridge Univ. Pr. (國廣哲彌監訳『理論言語学』大修館)
- 興津達朗. 1976 『言語学史』(英語学大系 第14巻) 大修館書店
- Robins, R.H. 1967. *A Short History of Linguistics*. London : Longman.
- Waterman J. T. 1970. *Perspectives in Linguistics* (Second Edition) Chicago & London : The Univ. of Chicago Pr. (上野直蔵・石黒昭博訳『現代言語学の背景—展望と現状』南雲堂)